

巻頭
言

安倍晋三元総理への Homage

| 会長 山崎 學



8月14日、岸田文雄総理が次期自民党総裁選の再選不出馬を記者会見で表明した。国民に対して自民党が失った信頼回復のために身を引くと責任感を強調しているが、再選を目指して裏金問題で火をつけて、再選の邪魔になる派閥を解消させ、マスコミと一緒に政治的混乱を引き起こした罪は万死に値する。さっそく総裁選候補にはマスコミ受けする「背中から刺すと揶揄される君」「電力事情が逼迫して停電が危惧される中でも原発反対でサーフィンに興じる君」「媚中派で（ハイ次の質問）を連呼する君」と、かつて小沢一郎議員がいみじくもいった「神輿は軽くて馬鹿が良い」が候補に挙がり、自民党を支えてきた保守本流の政治家は二の次の扱いである。お盆という政治家にとって選挙区回りで忙しい時期に次期総裁選に向けて東京に縛り付けられる迷惑にお構いなく不出馬会見をする見識のなさには恐れ入る。この原稿を書いている時点で日本経済新聞とテレビ東京の緊急世論調査では次期総裁候補として全体では小泉進次郎23%（自民党支持層32%）、石破茂18%（同13%）、高市早苗11%（同14%）、小林鷹之8%（同8%）、河野太郎7%（同9%）、上川陽子6%（同6%）、林芳正2%（同1%）、茂木敏充1%（同2%）、野田聖子1%（同0%）、加藤勝信1%（同1%）、齋藤健1%（同1%）、わからない19%（同11%）と報道されている。

「自民党をぶっ壊す」といって郵政民営化を旗印に小泉純一郎氏が行った劇場型選挙で自民党は圧勝したが、竹中平蔵氏と組んで行った親米路線の市場原理主義で国民の平均所得は減少し、労働者派遣業解禁で非正規職員が急増した結果として企業の内部留保は増加した一方で派遣業者の乱立による実質賃金の低下がより顕著となったことで、若者の成婚率は下がり少子化に歯止めがかからなくなったことを忘れてはならない。また、少子高齢化による生産人口が減少している中で「働き方改革」による労働時間の制限という二重に首を絞めるような社会実験を行っている。この結果はあらゆる分野で労働者不足を招き、その結果として物流は大幅に停滞して価格は高騰し、人員不足は人件費の高騰を招き、ベースアップをしても消費者物価の上昇に追い付かないで、約2年間にわたり実質賃金はさらに減少している。

こうした中でマスコミを含めて芸能人の人気投票のようなバカ騒ぎはいい加減にしてほしい。9月12日に告示される自民党総裁選は選挙後に行われる解散総選挙を念頭において選挙基盤の弱い当選回数のない議員の間では「選挙に強い新しい自民党の顔」を模索する動きが顕著になってきている。従来は派閥均衡型で選出していた閣僚選出も派閥を解散した中で首班指名をした

後の組閣をどのように行うのか皆目見当がつかない。告示から2週間という長丁場の選挙期間も岸田首相が9月下旬の国連総会での演説に固執したからとも聞く。退任を発表したレームダックの首相の演説など国連総会では誰も相手にしないと肝に銘じるべきである。

国会は立法府である。国会議員は公費で政策秘書を抱えているし、調査権も持っている。現在、日本が直面している課題について真摯な態度で向き合う必要があるし、国会議員の業績は仕上げた議員立法の質と数で評価されるべきなのに、こうした観点からの分析はマスコミ報道に乗ることなく、選挙区の夏祭りで盆踊りに興じたり、かき氷をほおぼったりする映像を流して人気度を押し量るのであるとすれば、まさに亡国の一途をたどっている感がある。

安倍晋三元総理に会えなくなってから3年が経ってしまった。携帯電話の待ち受け画面で互いにこやかに笑っている「在りし日の安倍晋三と撮ったツーショット」を見るたびに泉下で地団駄踏んで悔しがっている安倍晋三元総理の声が聞こえてくる気がする。

